

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

一次産品問題の現代的位相 : 1980年代以降の熱帯産農産物貿易

著者	千葉 典
雑誌名	神戸外大論叢
巻	57
号	1
ページ	387-405
発行年	2006-06-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000888/

一次産品問題の現代的位相

—— 1980年代以降の熱帯産農産物貿易 ——

千 葉 典

1. 問題の所在

いわゆる「一次産品問題」は、1950年代から南北格差の原因のひとつとして国際問題化し、70年代には資源ナショナリズムの高揚と国際社会における開発途上国の発言力強化をもたらすこととなったが、今日もなおその根本的解決をみるに至っていない、国際貿易上の古くて新しい課題である。

周知のとおり、1960年代をつうじて低迷を続けた一次産品価格は、73年の第一次石油危機を契機とした原油価格の急騰に牽引され、70年代には熱帯産農産物価格も比較的安定的に推移した。しかし、製造業品の価格はそれを上回るペースで同時に上昇し、結局石油以外の一次産品は、製造業品に対する交易条件をいっそう悪化させていった。さらに第二次石油危機を経て80年代に入ると、低下を始めた石油価格に影響されてその他の一次産品価格も低迷するようになり、製造業品との価格差はさらに拡大を続けた。⁽¹⁾

こうした状況を打開するべく、1970年代初頭には開発途上国が「新国際経済秩序」を提唱するようになり、74年には国連総会が「新国際経済秩序の樹立に関する宣言および行動計画」を採択、76年には国連貿易開発会議で「一次産品総合プログラム」が議論の俎上に乗せられた。しかし、翌77年に先進国も加わって始まった価格安定基金設立交渉は難航し、当初の構想は実現しないままに立ち消えとなった。他方では、産油諸国と非産油諸国、NICsを

はじめ工業化に成功した国々とそうでない国々との経済的格差が拡大し、開発途上国間の足並みも乱れがちになった。そして80年代に入り、開発途上国の累積債務が国際問題化するに至って、一次産品をめぐる資源ナショナリズムの動きは国際的後退を余儀なくされ、鳴りを潜めていった。⁽²⁾

1986年に開始されたガット・ウルグアイ・ラウンド（UR）は94年に妥結し、95年にはWTOが設立された。サービス貿易や知的所有権等のいわゆる「新分野」で一定の妥協を余儀なくされた開発途上国は、先進国の譲歩、とりわけ農業分野の市場開放を要求し、UR合意によって農産物輸出が拡大するとの期待が高まった。しかし、開発途上国からの農産物輸出、とりわけ熱帯産品輸出は、その後期待されたほどの拡大をみることなく、WTO体制に対する農産物輸出開発途上国の不満は、かつてないほどの高まりをみせている。このことが、現下のWTO新ラウンド（ドーハ開発アジェンダ）の行き詰まりの一因となっていることは、随所で指摘されてきた。

上記のような国際的動向の背景のひとつを、世界農産物貿易の内容構成に求めることができよう。世界の農産物輸出総額に占める熱帯産農産物主要12品目の割合は、1961年には29.4%と約3割を占め穀物のほぼ2倍に達していたが、1970年22.2%、1980年19.3%、1990年11.8%と減り続け、2000年には8.6%と、ついに1割を切る水準にまで低下した。⁽³⁾ こうした熱帯産農産物輸出の地位低下は、「伝統的農産物」の後退と「非伝統的・高付加価値農産物」の重要性の増加という、グローバリゼーション下の世界農産物貿易における構造変化の一環を構成している。⁽⁴⁾ したがって、単なる南北対立の政治的構図や市場開放に向けた先進国責任論のみならず、それを生ぜしめた経済的条件の詳細な分析を踏まえなければ、今日みられる農産物輸出開発途上国の不満の所以は理解できず、問題解決の糸口もつかめないであろう。

本稿の課題は、1980年代以降における「伝統的」熱帯産農産物貿易の動向を分析し、包括的把握を試みることである。その際、異なる品目の数量データを合算することには一般に分析上の意義が認められないことから、対象を

主要な熱帯産農産物7品目に絞り込み⁽⁵⁾、数量ベースおよび金額ベースのデータをともに視野に収めつつ、それらを組み合わせながら価格水準をも示せる輸出変動率チャートを導入して、品目別に分析を進めていくこととしたい。こうした作業によって、当該期間における熱帯産農産物貿易がどのような展開を示し、今日の農産物輸出開発途上国の姿勢にどのような影響を与えているのか、その一端が明らかにされるはずである。

2. 熱帯産農産物貿易の概観

最初に、1980年代から90年代にかけての熱帯産農産物貿易を、主要品目ごとに概観しておこう。第1表は、主要7品目の熱帯産農産物について、世界全体の輸出量を国連食糧農業機関（FAO）のデータに基づいてまとめたものである。数量ベースの中期的なデータについては、多少の年次変動があるものの、全体的な増加傾向が明確に確認できる。1980年から2000年まで20年間の変化をみると、カカオ豆が106万トンから250万トンへ135.1%増と2倍以上になり、生ゴムは332万トンから557万トンへ67.6%増加した。また、砂糖（粗糖と精製糖の合計）は2,750万トンから3,964万トンへ44.1%増、コーヒーは375万トンから593万トンへ58.2%増、茶は98万トンから149万トンへ51.6%増、こしょうは17万トンから26万トンへ53.5%増と、5割前後の増加となっている品目も多い。増加率がもっとも低い綿花でも、483万トンから578万トンへ19.6%の増加を記録している。

しかしながら、同じ品目について輸出額をまとめた第2表によると、金額ベースでの傾向は増減を繰り返し、必ずしも数量ベースのそれに連動していないことがわかる。20年間の増加率がもっとも高かったのはこしょうで、同じく1980年から2000年の間に2.9億ドルから10.1億ドルへ3.47倍の伸長を遂げたが、これは1997年から2000年にかけての価格暴騰を反映した一時的現象とみてよい。しかし、この点を差し引いても2001年以降の輸出総額は継続的に

第1表 世界の主要熱帯産農産物の輸出量

(千トン)

	砂糖(粗糖 +精製糖)	コーヒー	カカオ豆	茶	こしょう	生ゴム	綿花
1978年	26,164.3	3,447.7	1,086.3	885.7	176.6	3,317.4	4,471.3
1979年	26,702.9	3,799.7	929.4	904.5	163.0	3,408.7	4,358.6
1980年	27,504.8	3,746.9	1,064.7	983.8	166.5	3,324.7	4,834.2
1981年	29,360.9	3,741.8	1,331.8	952.0	174.6	3,137.1	4,262.0
1982年	30,692.5	3,970.8	1,249.8	926.5	168.0	3,109.9	4,429.3
1983年	29,582.3	4,039.3	1,205.5	975.3	165.6	3,448.4	4,271.7
1984年	28,657.8	4,237.6	1,354.3	1,080.2	165.2	3,640.7	4,234.9
1985年	28,388.6	4,433.5	1,384.9	1,082.6	144.5	3,646.8	4,137.0
1986年	27,770.2	4,108.0	1,557.1	1,095.1	177.1	3,721.1	4,694.6
1987年	28,818.0	4,490.1	1,610.6	1,102.3	166.5	4,086.5	5,408.9
1988年	29,214.3	4,247.2	1,667.2	1,142.1	172.4	4,234.5	4,779.3
1989年	30,278.6	4,811.2	1,906.5	1,206.2	208.1	4,384.5	5,894.1
1990年	30,067.4	5,042.9	1,896.4	1,227.5	208.2	4,063.7	5,119.6
1991年	29,835.4	4,881.6	1,896.0	1,196.1	230.0	4,133.6	4,801.5
1992年	32,585.3	4,984.3	1,767.1	1,125.7	242.6	4,328.8	5,874.9
1993年	30,015.0	4,953.1	2,112.4	1,222.7	206.3	4,136.0	5,156.3
1994年	30,621.3	4,838.1	1,867.8	1,061.4	214.2	4,468.0	6,155.5
1995年	35,586.7	4,477.0	1,823.4	1,168.4	224.8	4,624.2	5,815.8
1996年	36,714.4	5,113.1	2,515.3	1,212.6	242.1	5,138.6	5,559.0
1997年	38,289.7	5,225.9	2,153.6	1,312.6	240.8	5,157.9	5,499.8
1998年	39,669.1	5,238.7	2,094.2	1,415.0	217.8	5,334.6	5,729.6
1999年	42,467.2	5,617.9	2,445.3	1,372.2	248.7	5,315.3	4,956.2
2000年	39,639.1	5,926.5	2,503.4	1,491.6	255.5	5,573.7	5,783.7
2001年	42,388.8	5,820.4	2,392.9	1,450.1	269.2	5,497.8	5,936.9
2002年	45,476.2	5,910.7	2,446.0	1,367.0	324.8	5,941.7	6,146.3
2003年	43,929.8	5,688.6	2,408.8	1,530.0	288.5	6,540.2	6,884.3
2004年	45,105.9	6,140.1	2,889.5	1,614.6	288.5	7,575.9	6,850.0

出所: Food and Agriculture Organization of the United Nations, FAOSTAT Databases
 (<http://faostat.fao.org/site/412/DesktopDefault.aspx?PageID=412>) の Agriculture &
 Food Trade より作成 (2006年10月17日アクセス)。

5億ドルを超える水準に達しており、7割以上の輸出額増加を記録していることは疑いない。また、茶の輸出額も同期間に増加しており、20億ドルから29億ドルへ45.4%の増加を記録した。これに対して他の品目は、砂糖が145億ドルから88億ドルへ39.7%減、コーヒーは125億ドルから100億ドルへ20.0%減、カカオ豆は28億ドルから22億ドルへ22.6%減、生ゴムは44億ドルから38億ドルへ12.3%減、綿花は78億ドルから66億ドルへ16.1%減と、輸出額を

第2表 世界の主要熱帯産農産物の輸出額

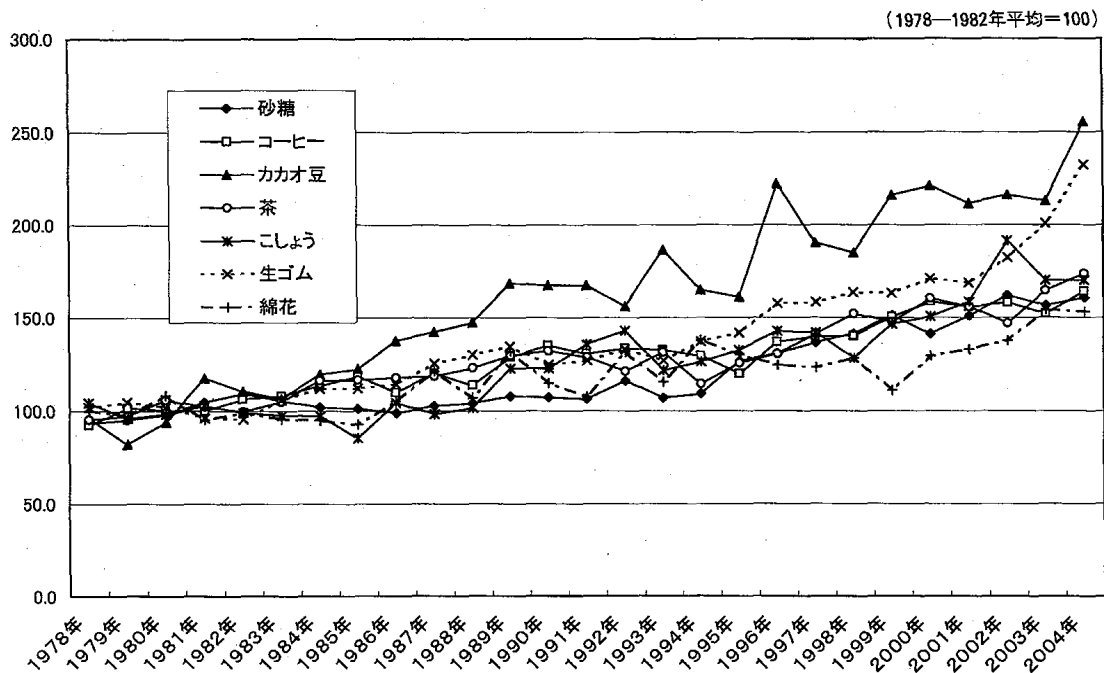
(百万ドル)

	砂糖(粗糖 +精製糖)	コーヒー	カカオ豆	茶	こしょう	生ゴム	綿 花
1978年	8,481.7	11,035.5	3,410.5	1,822.4	348.8	3,046.6	6,067.0
1979年	9,215.8	12,083.4	3,048.8	1,749.6	307.4	4,035.7	6,660.3
1980年	14,669.7	12,463.7	2,827.1	2,026.4	290.7	4,366.4	7,846.2
1981年	14,783.3	8,512.4	2,359.2	1,813.6	244.2	3,369.7	7,327.1
1982年	11,348.0	9,309.5	1,986.2	1,642.0	209.3	2,495.6	6,393.0
1983年	10,815.7	9,407.5	1,972.2	1,943.7	216.9	332.5	6,496.2
1984年	10,000.6	10,980.6	2,841.7	2,860.8	326.3	3,531.5	7,171.0
1985年	9,051.6	11,381.1	2,874.7	2,365.6	431.7	2,770.0	6,026.2
1986年	9,649.2	15,302.6	3,285.1	2,052.6	728.5	2,951.4	5,323.9
1987年	9,542.8	10,369.4	3,196.4	2,096.0	762.0	3,796.1	6,684.5
1988年	10,623.3	10,533.0	2,795.9	2,168.4	568.2	5,011.1	7,506.2
1989年	11,945.9	9,655.0	2,586.8	2,450.2	499.4	4,165.0	8,586.2
1990年	13,220.9	7,692.0	2,138.1	2,774.9	363.3	3,392.3	8,431.5
1991年	10,206.1	7,384.0	1,955.4	2,464.4	304.8	3,411.0	7,755.2
1992年	9,926.8	6,220.8	1,817.4	2,271.2	272.1	3,633.0	7,506.5
1993年	8,959.1	6,667.6	2,013.6	2,314.0	294.2	3,496.5	5,881.9
1994年	10,172.1	11,966.5	2,181.5	2,067.0	452.1	4,742.0	8,357.5
1995年	13,170.4	13,686.0	2,448.6	2,278.3	579.8	7,130.2	10,149.3
1996年	12,977.5	11,786.9	3,271.1	2,463.6	570.6	7,085.7	9,286.8
1997年	12,484.6	14,711.0	2,945.7	2,978.5	912.5	5,659.4	8,912.3
1998年	12,131.6	13,578.6	3,165.4	3,360.0	1,014.8	3,978.5	8,049.6
1999年	10,101.9	11,300.1	2,939.2	2,788.9	1,142.2	3,315.9	6,006.4
2000年	8,848.9	9,962.0	2,217.2	2,946.2	1,010.0	3,830.3	6,582.5
2001年	10,616.5	6,832.2	2,471.0	2,821.0	522.5	3,254.4	6,656.0
2002年	9,978.3	6,520.8	3,964.0	2,506.2	539.4	4,280.7	6,085.1
2003年	10,551.9	7,476.8	4,392.4	2,941.4	526.9	6,424.3	8,128.3
2004年	11,262.3	9,113.0	4,214.3	3,272.9	503.8	8,474.9	9,737.3

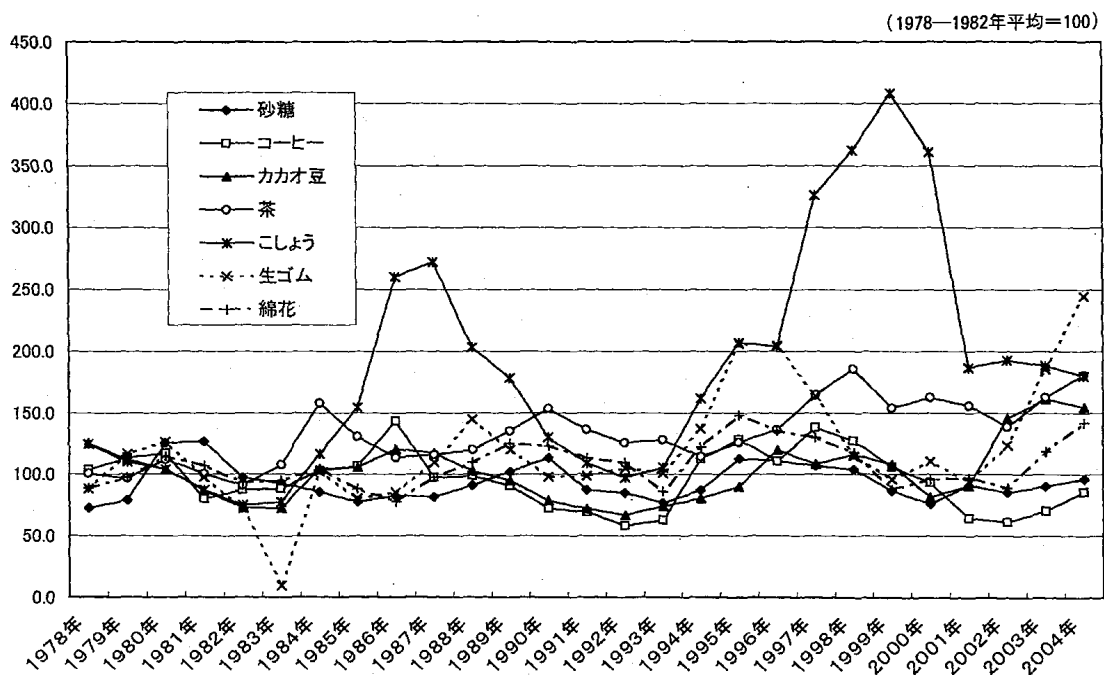
出所：第1表に同じ。

軒並み減少させており、これらの産品の輸出国が置かれた厳しい状況を伺うことができる。

ただし、上記の増減は特定年次の価格事情を反映している可能性があり、このデータのみから中期的傾向を判断することにはかなりの危険が伴う。そこで、1980年の前後5年間について平均値を算出し、これを100として各年次の数値を指標化したものが、第1図と第2図である。第1図から、2000年頃の各品目の世界輸出量は、基準年の2倍を超えているカカオ豆を例外とし



第1図 世界の主要熱帯産農産物の輸出量



第2図 世界の主要熱帯産農産物の輸出額

て、ほぼ3割～7割の増加を記録していることがわかる。これに対して、同様に世界輸出額を指標化した第2図からは、こしょうと生ゴムに激しくみられるように輸出額の年次変動が著しいこと、それにもかかわらず若干の例外を除いて、20年間の輸出額の変動はほぼ基準年の±50%の水準におさまっていることが観察される。ちなみに2000年の指数を示すと、こしょう361、茶

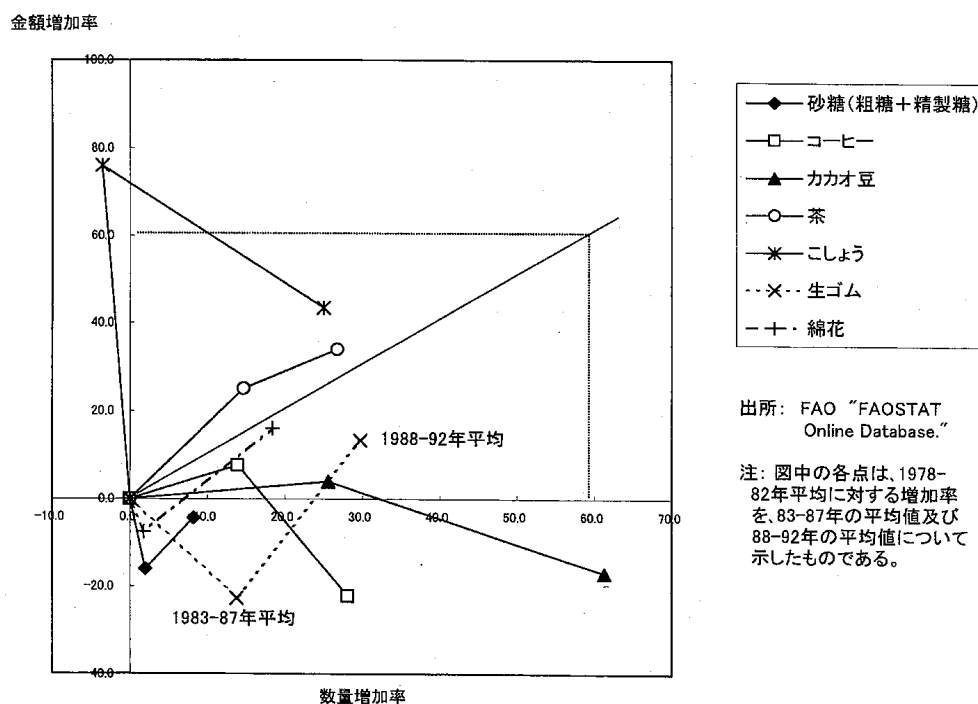
163, 生ゴム111, 綿花96, コーヒー93, カカオ豆81, 砂糖76となっている。当該期間で2回目の大ブームに当たったこしょうと1990年代後半以降の輸出額が堅調に推移している茶を除くと, 2000年頃の輸出額は基準年と大差ないか減少していることがわかり, 年次変動を考慮に入れた場合も結果はほぼ変わらないことが確認できる。

以上の分析では世界の輸出量と輸出額を別個に扱ってその傾向を確認してきたが, これらを組み合わせることによって価格水準の変動を組み込んだ分析が可能になる。以下, 対象期間を1980年代と90年代とに区分したケースを含め, 熱帯産農産物貿易の動向をさらに詳しく分析していきたい。

3. 熱帯産農産物貿易の動向分析

(1) 1980年代の動向

第3図は, 1980年代を前半と後半に区分し, それぞれの期間における熱帯産農産物貿易の動向を数量ベース・金額ベースの両面から一体的に把握する



第3図 主要熱帯産農産物の輸出 (1980年代)

ため作成した、変動率チャートである。このチャートでは、1980年を中心とする5年間の平均（基準点）に対する83～87年平均（85年中心値）および88～92年平均（90年中心値）の輸出変動率を品目ごとにプロットし、直線で結んだ。各年次について5年間の平均値を用いるのは、短期間の急激な価格変動による極端な影響を緩和し、5年ないし10年にわたる傾向を単純に示すためである。横軸には数量変動（増加）率、縦軸には金額変動（増加）率を取り、点線は基準点に対する増加率60%の水準を示した。また、原点から向かって右上方に伸びる直線は、数量増加率と金額増加率が等しくなるラインである。したがって、プロットされた点がこの直線の左手上方にあれば、金額増加率が数量増加率を上回り、基準点に対して価格水準が上昇していることがわかる。反対に、プロットされた点がこの直線の右手下方にあれば、金額増加率が数量増加率を下回り、基準点に対して価格水準は低下していることになる。⁽⁶⁾

1980年代前半は、世界全体で農産物貿易が金額的に収縮した時期であったが、いくつかの熱帯産農産物もその例にもれない。85年中心値を基準年と比較すると、輸出量が微増したのに輸出額が減少し価格的に大きく不利になったのが、砂糖（輸出量2.0%増・輸出額16.1%減。以下同様）、綿花（1.8%増・7.6%減）、生ゴム（13.8%増・22.7%減）の3品目である。これらの品目の価格水準は80年代後半に多少持ち直し、結局10年間に綿花の輸出量が18.4%増・輸出額16.0%増、生ゴムは輸出量29.7%増・輸出額13.3%増と、数量・金額ともに増加したが、増加率では前者が後者を上回り、基準年の価格水準を回復するには至らなかった。また、砂糖の輸出量は10年間で8.2%増加したが、輸出額は4.4%減少し、価格的には言うまでもなく、輸出の絶対額でも基準年を下回ることになった。

さらに相場が低調に推移したのがコーヒーとカカオ豆で、いずれも80年代前半には輸出量が伸長したが、輸出額は微増にとどまった。基準年から5年間に、コーヒーは輸出量13.9%増に対して輸出額7.6%増、カカオ豆も輸出

量25.6%増に対して輸出額は3.9%増と、いずれの品目も前者が後者を上回り、価格水準は低下した。このため、各国が輸出額を増やそうとして輸出量を増加させるという悪循環を生じたためか、80年代後半の価格水準はさらに悪化する。結局10年間で、コーヒー輸出量は28.1%増加したのに輸出額は22.3%減少、カカオ豆に至っては輸出量61.3%増に対して輸出額17.2%減と、数量が増加しても金額は絶対的に減少する、最悪の状況に陥った。

これらの品目に対して、茶の輸出は安定的に伸長した。基準年に対し、5年間で輸出量14.7%・輸出額25.0%、10年間では輸出量26.8%・輸出額34.0%と、いずれも順調に増加し、価格的にもやや有利に推移した。こしょうの貿易は極端な動向を示しており、基準年から5年間で輸出量が3.5%微減したのに対して輸出額は76.1%も急伸、価格水準は急上昇した。その後80年代中頃のブームは急速におさまり、結局10年間では輸出量が25.0%増、輸出額は収縮して43.4%増にとどまったが、80年代の初頭と比べても価格的にかなり有利な水準を維持していることがわかる。

以上のように、熱帯産農産物貿易の動向は、価格水準が急騰したこしょうと安定的に成長した茶を除くと、80年代前半に軒並み価格水準の低下に見舞われた。とくに綿花、生ゴム、砂糖は、輸出の絶対額までもが減少するほどであった。これらの3品目については、80年代後半になって市況がやや回復するものの、80年代初頭の価格水準を回復するには至らなかった。また、コーヒーとカカオ豆については、輸出量の増加に輸出額がついて行かない80年代前半の状況が、後半にはさらに悪化し、数量ベースで輸出を大きく伸ばしたにもかかわらず、金額ベースではむしろ市場規模が収縮するという結果に終わってしまったのである。

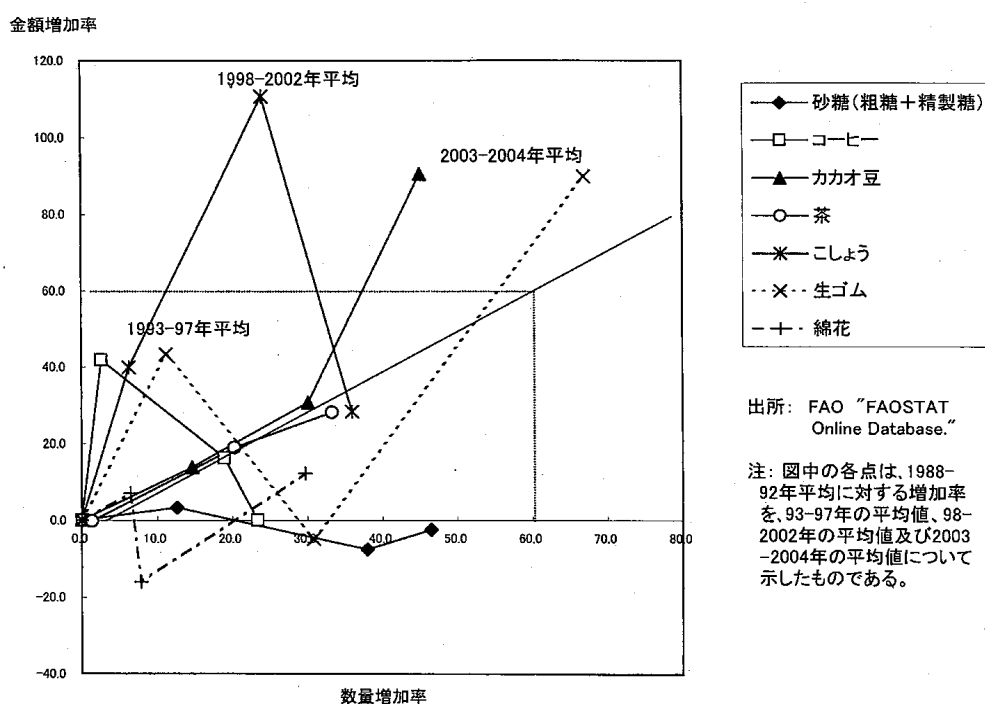
(2) 1990年代の動向

熱帯産農産物貿易の動向は、1990年代にはいと大きく変化した。第4図は、第3図と同様の方法で作成した主要7品目の輸出チャートである。ここ

では基準点を1988～92年平均（90年中心値）に置き、基準点に対する93～97年平均（95年中心値）および98～2002年平均（2000年中心値）の増加率を品目ごとにプロットした。また参考のため、2003～04年平均値を3番目の点として示している。

90年代前半は、全体として農産物貿易が金額的に拡張した時期であり、熱帯産農産物の輸出額も総じて増加傾向に転じた。輸出額の増加が輸出量の増加を大きく上回った品目が、コーヒー、こしょう、生ゴムである。90年代の前半5年間に、世界のコーヒー輸出は数量でわずか2.7%増にとどまったのに対し、金額では41.8%増加した。同様に、こしょうの輸出は数量6.3%・金額39.9%、生ゴム輸出は数量11.3%・金額43.3%それぞれ増加、金額増加率が数量増加率を大幅に上回り、価格的にかなり有利な展開をみせた。

こしょうについては90年代後半も高騰傾向が加速し、98年～2000年のブーム期には輸出総額が10万ドルを超える水準に達した（第2表参照）。その結果、10年間で輸出量が24.0%、輸出額は110.6%の増加を示し、金額では2倍以上に膨張した勘定になる。しかし、このブームは2001年には急速に終息



第4図 主要熱帯産農産物の輸出（1990年代）

へ向かい、2003～04年平均値は基準年に対して輸出量35.9%増、輸出額28.3%増とほぼバランスのとれた成長ペースに復帰、価格的には基準点をやや下回る水準にまで下落している。

コーヒーと生ゴムの場合、90年代後半に大幅な価格下落を経験し、前半に輸出国が得た有利な地位はほぼ完全に失われた。基準点に対する10年後のコーヒー輸出量は19.2%増・輸出額は16.2%増と後者が前者を上回っており、やはり価格的には基準点を下回る水準にまで下落した。その後も価格水準の下落には歯止めがかからず、2003～04年平均の輸出量は23.4%へと継続的に伸長したものの輸出額はちょうど基準年の水準に復帰しており、12年前と比べて輸出量は増えたのに、輸出国が獲得した外貨はまったく変わらないという結果を生んだことになる。生ゴムの価格水準下落はさらに著しく、90年代に輸出量が30.8%増えたのに対して輸出額は4.9%減少し、10年前に比べると輸出量の増加にもかかわらず獲得外貨額はむしろ減少した。ただし2003～04年にかけて生ゴム相場が急騰しており、輸出額・輸出量とも近年は急増しているが、こうした動きがいつまで続くかは予断を許さない。

90年代前半期の価格水準が安定的に推移したのが、カカオ豆、茶、綿花の3品目である。カカオ豆の輸出は、5年間で数量14.7%・金額13.9%とそれぞれ順調に増加し、10年間では数量30.1%増・金額30.7%増と、バランスのとれた成長が続いた。2003～04年には相場が急騰して輸出額は40億ドルを突破し、生ゴム同様に一種のブームとなったが、こうした状況が継続するか、それとも一時的現象なのか、注意深く見守る必要がある。茶については90年代前半の動きがほとんどなく、当初5年間は輸出量1.4%増・輸出額0.2%減であったが、後半に入ると輸出が伸長し、10年間では輸出量20.3%・輸出額18.9%とバランスのとれた増加を記録した。2003～04年平均まで延長した数値でも、基準年に対して輸出量33.3%増・輸出額28.1%増と、価格的にはやや弱含みながら輸出が成長を続けている。

これらの品目に比べて、綿花の輸出動向は90年代前半と後半とで大きく反

転する。95年中心値を基準年と比較すると、輸出量6.5%増・輸出額7.0%増の微増にとどまっているが、価格的にはほぼ同水準で推移している。しかし、2000年中心値における輸出量は対基準年で7.9%の増加にとどまり、90年代後半はほとんど輸出が伸びていない。そればかりか、輸出額に至っては16.1%の減少を記録しており、この間に著しい価格下落を被ったことがわかる。皮肉にも WTO 設立直後の5年間に、綿花貿易は輸出国にとってきわめて不利な状況に転落したのであり、新ラウンドにおける最大の争点のひとつになってしまったのも、けだし当然といえよう。その後綿花市場は若干の回復を示し、2003～04年平均値は、基準年に対して輸出量29.7%増・輸出額12.3%増といずれも回復基調にあるが、前者は後者を大きく上回っており、いまだに90年代初頭の価格水準を回復するには至っていない。

砂糖貿易の動向は、これに輪をかけて苦しい立場に置かれている輸出国の姿を明確に示している。90年代前半に輸出量は12.7%の増加を記録した一方で、輸出額の増加は3.3%にとどまり、価格水準は輸出国にとってかなり不利に推移した。90年代後半の展開はさらに悲劇的であり、2000年中心値は基準年に対して輸出量37.9%増・輸出額7.6%減と、いくら輸出を増やしても貿易黒字につながらない輸出国の悲鳴が聞こえてきそうな状況である。2003～04年平均値でもさしたる改善をみることはなく、対基準年で輸出量46.5%増・輸出額2.5%減と、数量ベースでは10年あまりで5割近く輸出を増やしているにもかかわらず、輸出国が入手できる外貨はむしろ微減してしまったことになる。

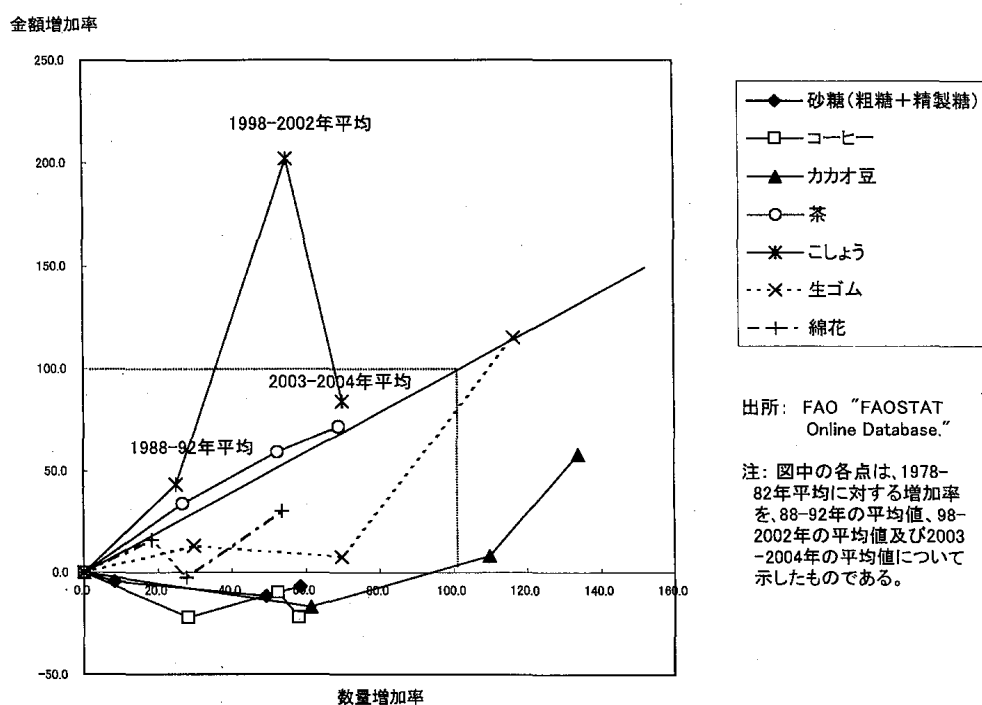
このように、熱帯産農産物の輸出動向は、90年代前半は安定的に推移するか、品目によっては主として価格水準の上昇により4割程度輸出額を増加させることができた。しかし、90年代後半に入ると、ブームを加速させたこしょうを例外として（そのブームも2001年で終息する）、カカオ豆や茶のように同様の価格水準で輸出を伸長させるか、さもなくばコーヒー、生ゴム、綿花、砂糖のように一転して価格水準の低下に見舞われ、これらの品目の輸出国は

きわめて厳しい貿易環境にさらされることとなったのである。

(3) 1980年代以降の総合的動向

ここまでは、主要な熱帯産農産物の貿易について、1980年代と90年代とに対象期間を分けて分析を進めてきた。さらに進んで両期間の分析を統合するため、80年代以降の総合的動向について俯瞰的分析を行っておこう。

第5図は、上記と同様の方法で作成した主要7品目の輸出チャートである。20年あまりの対象期間を一顧に収めるため、基準点を再び1978～82年平均（80年中心値）に設定し、表示点は10年刻みとして、88～92年平均（90年中心値）および98～2002年平均（2000年中心値）の増加率を品目ごとにプロットした。したがって、第5図における1番目の点は、第3図における2番目の点（各品目ラインの右端）と同じ配置である。また、第4図と同様に、参考のため2003～04年平均値を3番目の点として示している。なお、第5図上の点線は増加率100%のラインであり、当該年次の点がこの線の外側にあれば、輸出量・輸出額が基準点に対して2倍を超えることを示している。



第5図 主要熱帯産農産物の輸出（1980年代以降）

一見すればわかるように、10年刻みでデータを整理すると、この20年あまりの期間に価格水準が著しく上昇した品目はほとんどない。唯一の例外はこしょうで、とくに2000年中心値はブームの時期だったことが影響し、基準年に対して輸出量55.0%増、輸出額は約3倍になり202.0%と大幅な増加を記録した。おおまかな計算だが輸出データ（第1表、第2表）からトンあたり価格を算出すると、1978～82年平均の1,650ドルから1998～2002年平均の3214ドルへ、倍近く跳ね上がった勘定になる。しかし、ブーム終息後の2003～04年平均価格は1,786ドルと、基準年をやや上回る水準に復帰した。

茶の貿易は、数量ベースでも金額ベースでも堅実に成長してきた。基準年に対して1990年中心値が輸出量26.8%増・輸出額34.0%増、2000年中心値は輸出量52.5%増・輸出額59.3%増と、いずれも20年間で5割以上増加した。トンあたり輸出価格は1978～82年平均が1946ドル、1998～2002年平均が2033ドル、2003～04年平均が1,976ドルで、価格面も安定的に推移した。

その他の品目については、価格水準の著しい低下と輸出額の停滞を指摘せざるを得ない。生ゴム輸出は、基準年に対して1990年中心値が輸出量29.7%増・輸出額13.3%増、2000年中心値は輸出量が69.7%増加しているのに輸出額は7.8%増にとどまり、90年代は金額ベースでむしろ輸出が縮小した。トンあたり輸出価格は1978～82年平均が1062ドル、1998～2002年平均が675ドルで、この間に36.5%も下落した。綿花輸出は80年代は堅調に推移したが、90年代に大きな打撃を受けた。基準年に対して、1990年中心値は輸出量18.4%増・輸出額16.0%増と、価格的に弱含みながらも堅調に推移したが、2000年中心値は輸出量の27.7%増加に対して輸出額は2.7%減少となり、90年代には金額ベースで貿易規模が大きく縮小しほぼ20年前の水準に逆戻りした。トンあたり輸出価格は1978～82年平均が1534ドル、1998～2002年平均が1,169ドルで、20年間に23.8%の下落を記録している。

これとは逆に、カカオ豆輸出の場合80年代に大打撃を被り、1990年中心値は基準年に対して輸出量61.3%増・輸出額17.2%減と、輸出国にとって著し

く不利な貿易環境が生じた。こうした状況は90年代に入ってやや緩和されるが、それでも2000年中心値は輸出量が対基準年109.9%増と数量ベースで貿易は倍増しているのに、輸出額は8.3%のわずかな増加にとどまり、輸出が増えても外貨はなかなか獲得できないという実態に変わりはない。カカオ豆のトンあたり輸出価格は1978～82年平均が2,408ドル、1998～2002年平均が1,242ドルで、20年間に48.4%の下落と、約半額になってしまった。なお第5図からは、上記の3品目について、2000年以降の市況が回復し輸出が急速に伸びつつあることが読み取れる（3番目の点を結ぶラインが右上方向に急伸）。しかし、こうした短期的な動きが本格的な貿易の回復につながるかは、予断を許さないところであろう。実際、2003～04年平均のトンあたり輸出価格は、カカオ豆が1,624ドル、綿花が1,301ドルで、いずれも基準点（80年前後）の水準を大きく下回っており、もっとも好調な生ゴムでも1,056ドルと、20余年前の水準をほぼ回復したに過ぎないのである。

砂糖とコーヒーについては、さらに金額ベースの輸出低迷が著しい。砂糖の輸出は、基準年に対する1990年中心値で輸出量8.2%増・輸出額4.4%減となり、80年代には数量ベースの伸びがわずかにとどまる一方、金額ベースでは貿易規模が縮小した。その後この傾向は加速し、2000年中心値は輸出量が49.3%増加しているのに輸出額は11.7%減少、90年代に状況はいっそう悪化した。トンあたり輸出価格は1978～82年平均が417ドル、1998～2002年平均が247ドルで、この間に40.8%も下落したことになる。コーヒー貿易はとくに金額ベースで80年代の低迷が著しく、1990年中心値は基準値に対して輸出量で28.1%増加したにもかかわらず、輸出額では22.3%の減少を記録した。90年代にはさらに輸出量が増えるものの、価格水準の回復はみられず、2000年中心値は輸出量52.4%増に対して輸出額は9.8%減となっており、金額ベースでの貿易は20年前に比べて約1割縮小した。価格水準の低迷は言うまでもなく、トンあたり輸出価格は1978～82年平均が2855ドル、1998～2002年平均が1,690ドルで、下落率はやはり40.8%となっている。これら2品目につい

ては、2000年以降も目立った市況回復の気配はみられない。コーヒーに至っては、2003～04年の平均価格が1403ドルとさらに落ち込み、基準年の半額以下になってしまった。

このように、1980年代以降の主要な熱帯産農産物貿易は、一部の例外を除き、数量ベースでは拡大するものの金額ベースではわずかな増加にとどまるかむしろ縮小する傾向を示していること、これには各品目の価格低迷が大きく影響していることが明らかにされたと考える。上記の傾向に該当しない品目の代表格であるこしょうは、短期的な輸出額の変動がきわめて激しく（第2図）、一時的な高価格が生じても数年間で従前の水準に復帰している。また、安定的な輸出成長をとげてきた茶の場合、輸出価格の水準は1980年前後からさほど変化しているわけではなく、数量ベースの貿易拡大がほぼそのまま金額ベースの増加につながっているに過ぎないのが現状といえよう。

4. まとめに代えて

以上の分析結果は、熱帯産農産物貿易が総体として数量的には拡大したものの、價格的・金額的にはきわめて不利な状況に留め置かれていることを、明確に示している。このことが今日の農産物輸出開発途上国の不満を醸成する一因となっていることに、異論を唱える者は少ないであろう。砂糖、コーヒー、カカオ豆、綿花、生ゴムといった、典型的な熱帯産一次産品の貿易環境は、俯瞰的にみれば過去20年あまり継続的に悪化してきたのであり、UR合意によって達成されるはずだった自由貿易の利益と恩恵に与っていないとする一次産品輸出途上国の主張は、一見妥当な見解のように思われる。

しかし、本稿で示された熱帯産農産物の貿易環境悪化、それも約四半世紀に及ぶ中期的な傾向を考慮に入れると、こうした傾向が先進国の国内市場保護や多国籍アグリビジネスの価格操作のみによって生じた現象とは考えにくいことも、また明らかだと思われる。事実、本稿で取り上げた熱帯産農産物

の貿易は、過去20年あまりにわたって数量的ベースでは相当程度拡大してきている。1980年代初頭水準の価格が維持できないのは、構造的な供給過剰によるものではないのかとの疑いを禁じ得ない。短期的な価格変動を挟みながら、輸出国が価格水準低下による貿易黒字減少を補うため輸出増加に傾斜し、そのことが輸出価格水準をさらに悪化させるという悪循環の過程は、本稿の分析からも窺い知ることができよう。世界農産物貿易における金額ベースでの一次産品貿易の地位低下は、こうした文脈から理解されるべきである。品目によっては、価格高騰による外貨獲得機会の拡大が一時的に生じることもあるが、それは決して持続的な現象とはなり得ないであろう。

もちろん、先進国内で進行する「農業の工業化」が、上記の傾向を加速していることに異論はない。⁽⁷⁾ 人工ゴムによる天然ゴムの代替は言うに及ばず、EU諸国における甜菜糖製造や、穀物を原料とする異性化糖製造技術の開発、人工香料の研究開発等の諸要因が、開発途上国の一次産品輸出を妨げている可能性は、否定できない。しかし、そうであればなおさらのこと、単なる先進国の市場開放によって熱帯産農産物輸出に依存する開発途上国の貿易環境を改善することは、現実にはきわめて困難ではないだろうか。

グローバリゼーション下の世界農産物貿易の傾向を考慮すれば、「非伝統的・高付加価値農産物」の輸出を強化する方が、金額ベースでの貿易拡大に有益なことは明らかである。しかし、そうした地理的・気候的条件に恵まれていない国はどうすればよいのか、という問題は残る。農業以外の産業で突破口を開こうにも、輸出志向工業化戦略など望むべくもない開発途上国も、まだ数多く存在する。輸出農業と自給農業とのバランスも、政策選択における大きな問題のひとつである。

本稿で得られた限定的知見のみに基づいてこれらの諸課題に解答を提示することは、もとより不可能であろう。ただ、分析結果として少なくとも言えることは、グローバリゼーションが経済的に進行する今日もなお「一次産品問題」の基本構造は何ら変わっていないこと、「伝統的」熱帯産品への輸出

ドライブはきわめて危険な選択であること、そしてこれらの製品の輸出にもっぱら依存している限り、仮にWTO体制の下で市場開放がめざましく進展したとしても、それによって外貨獲得機会の劇的な拡大を望むとしたら、おそらく期待外れに終わるということである。

注

1. 平島 (1989) 6～7頁。
2. 「新国際経済秩序」の評価については、さしあたり、中村 (2000) 120～131頁を参照。
3. 千葉 (2005) 43頁。
4. グローバリゼーション下の世界農産物貿易における構造変化については、千葉 (2004) を参照されたい。「伝統的農産物」と「非伝統的・高付加価値農産物」の定義については、千葉 (2004) 11頁。
5. 選定に際しては、FAO (2002) に掲載された品目のなかから、一般に熱帯産農産物と考えられるものであって、2000年の輸出総額が10億ドルを超える品目を抽出した。ただし熱帯果実や植物油については「伝統的」熱帯産農産物ではなく「非伝統的・高付加価値農産物」に分類することが適当と考えられることから、選定の対象としなかった。また、コプラ、ジュートといった典型的な「伝統的」熱帯産農産物も、2000年の輸出総額が10億ドルに満たないため、選定の段階で除外した。こしょうについては、2000年の輸出総額が価格水準の急騰により一時的に膨張していることが明らかであるが (本文中に後述)、価格変動の激しい輸出農産物の典型的事例としてあえて選定し、分析の対象とした。
6. 本節で用いた増加率チャートの作成にあたっては、愛媛大学農学部胡柏教授からいただいた助言が不可欠であった。また、2次元平面上に変化率を示すという着想は、立命館大学国際関係学部の板木雅彦教授の示唆にもとづくものである。記して感謝に代えさせていただきたい。ただし、分析上の瑕疵や誤謬等の責任は、当然すべて筆者に帰するものである。
7. 「農業の工業化」の概念規定、およびその影響については、以下の文献を参照されたい。立川 (2003) 91～114頁、アルティエリ (2004)、松原 (2004) 54～62頁。

引用文献

- M. アルティエリ (2004) 「工業的農業が生態系に及ぼす影響と真に持続的な農業の可能性」F・マグドフ、J・B・フォスター、F・H・バトル編、中野一新監訳『利潤への渴望 アグリビジネスは農民・食料・環境を脅かす』大月書店、87～105頁。
- 立川雅司 (2003) 『遺伝子組換え作物と穀物フードシステムの新展開 —農業・食料社会学的アプローチ』農山漁村文化協会。
- 千葉 典 (2005) 「世界農産物貿易におけるパクス・アメリカナの展開過程 —1980年代を中心に—」『神戸大論叢』第56巻第1号、39～60頁。

- 千葉 典 (2004) 「グローバリゼーション下の世界農産物貿易 —1990年代を中心に—」
日本国際経済学会第63回全国大会自由論題報告論文, 2004年10月
(http://www.fbc.keio.ac.jp/jsie/13-2_Chiba_fill.pdf), 1~11頁。
- 中村雅秀 (2000) 『開発と世界経済』 ミネルヴァ書房。
- 平島成望 (1989) 「開発過程における一次産品問題」 平島成望編 『一次産品問題の新展開』 アジア経済研究所, 2~27頁。
- Food and Agriculture Organization of the United Nations (FAO) (2002)
FAO Trade Yearbook, Vol. 54-2000.
- 松原豊彦 (2004) 「世界の食料事情と多国籍アグリビジネスによる食料支配」 大塚茂・
松原豊彦編 『現代の食とアグリビジネス』 有斐閣, 51~74頁。